

初回病棟看護実習に関する検討

—— 3 年間の研究結果から ——

兵 藤 好 美, 近 田 敬 子, 丸 山 咲 野
三 浦 昌 子, 藤 原 治 美

An Investigation of Initial Clinical Training

——Results of Three-year Research——

Yoshimi HYODO, Keiko CHIKATA, Sakuno MARUYAMA,
Masako MIURA, Harumi FUJIWARA

Abstract: Students in nurse training usually have their initial clinical experience while still in their youth. On one hand, they learn much from the practice, but on the other hand, they experience varieties of anxieties and agitations. Because they are still in the process of forming their own inner consciousness, experiences during clinical training may cause crises in self-identity in the students.

We focus on the initial clinical training in a hospital, and discuss the results from statistical research.

The results from the first year investigation, “Effect of initial clinical experiences in a hospital on learning volition” suggest that it is necessary to help students to recognize problems positively, to assist them in coping with these problems and to support them through discussion and consultation because the first impression often greatly affects learning volition.

The second year results of investigation, “Study of educational programs for the initial clinical training in a hospital” suggest that it is necessary to provide students with educational programs to raise their self-motivation as a form of mental support, and to set up an adequate target for training subjects. It is also necessary to prepare a program for students to learn how to establish good and personal nurse-patient relationships in a training environment.

The third year results of investigation, “Study of introductory guidance for the initial clinical training in a hospital” showed a remarkable degree of improvement in student satisfaction by giving them introductory guidance.

However, we need to carefully consider choosing proper education materials lest students should feel guilty of their own lack of effort. As for further subjects, we should investigate how each student feels in each type of situations during training. It is also necessary to provide students with opportunities to talk with nursing staff when students feel strong anxieties and strain.

京都大学医療技術短期大学部看護学科（京都市左京区聖護院川原町53）

Division of the Science of Nursing, College of Medical Technology, Kyoto University

1993年7月15日受付

Key words: Initial clinical training, Anxiety, Agitation, Students' own inner consciousness, Coping with problems, Self-motivation, Nurse-patient personal relationships, Learning volition, Educational programs

はじめに

人間は社会的存在であると共に意識的存在であり、成長と共に自分の内部世界を構成する¹⁾。初回病棟看護実習とは、文字通り看護学生が初めて患者を受け持つ実習のことであるが、青年期にあたるこの時期の初回実習は、学びが大きい反面不安や動揺も強く、人間形成としての自己同一性に大きな影響を与え、重要な危機としても捉えられる。

そこで、この初回病棟看護実習について3年間にわたって研究及び検討を行った。その課題は「初回病棟実習が学習意欲に及ぼす影響」、
「初回病棟実習教育の明確化に関する研究」及び「初回病棟実習に向けての導入教育の検討」である。その結果を報告する。

研究方法

対象は、今までに病棟実習経験のない本学2回生である。2回生の実習期間は7月の第2週目、月曜日～金曜日の1週間であり、1990年～1992年までの3年間、毎年いずれも新たな2回生を対象に、初回病棟看護実習後の9月に質問紙による集合調査を行った。

対象学生数は、1990年76名、1991年72名、1992年77名であった。なお「初回病棟実習」とは、看護学科2回生が初めて病棟に出て、原則として患者1名を受け持ち、実習することと定義した。

第1回目の1990年には「初回病棟実習が学習意欲に及ぼす影響」についての調査を行った。質問紙は、達成度・学習意欲を測る項目と実習で強く印象に残った事等の項目で構成した。実習で最も印象に残った出来事とその際の感情傾向については、自由記載させた中から感情を6つの項目に分類し、また感情を肯定群・不安群・否定群の3群に分けて分類した。

さらに感情群別に、起因理由の内訳を患者・職員・婦長・学生・友人・医療全体の6項目に従って分類した。また達成度・学習意欲については、「学習に対する達成感」「情緒的消耗」「学習離れ」として作成し、設問を頻度別に1～7点で構成した。そして各感情群との関係について、t検定等を用いて検討した。

第2回目の1991年には、「初回病棟実習教育の明確化に関する研究」についての調査を行った。質問紙はストレス認知スケールのカテゴリー²⁾を参考に、5つの領域（生活援助・対人関係・実習課題・実習取り組み姿勢・実習環境）での気がかりなことと、その度合（1～5点）および各々の対処をコーピングスケール²⁾に基づき作成した。なお、初回病棟看護実習に対する満足度とその理由もあわせて質問した。満足度を高・低群に分け、その対処傾向（問題解決：感情調整・回避的対処）について χ^2 検定を行った。さらに満足度高低群それぞれの中で、気がかりなことの内容を対処傾向別（問題解決：感情調整+回避）に分類し、対処方法について χ^2 検定を行った。

さらに第3回目の1992年には第2回の調査結果を踏まえ、「初回病棟実習に向けての導入教育の検討」をテーマとし、特に人間関係における対処方法に重点を置いて、調査を行った。調査項目は対象者別（受持ち患者、家族・付添い、同室患者、スタッフ、友人、教官、自己の中で）に各々への人間関係における気がかりな内容と、それへの対処方法²⁾及び体験（実習）への感想と体験への主な原因（ワイナーモデル³⁾によるその帰属要因）についてである。

あわせて実習の前後の変化と学びにおいて、実習への期待及び看護婦に対するイメージ並びに初回病棟看護実習終了後の満足度（1～5点）を質問した。そして各々の全体の傾向を分析し、その内容等を検討した。なお昨年に引き続

き満足度を測定したのは、今年は新たに体験学習を実習前に取り入れたので、その効果を測定するためである。

研究結果

1. 初回病棟看護実習が学習意欲に及ぼす影響

1) 印象として強く残ったこと (感情傾向)

初回病棟看護実習において、実習終了時印象として強く残った感情は、図1に示す通りである。‘心配・嬉しい’といった感情は30%以上を占め、‘嫌だ’という感情は11%であった。

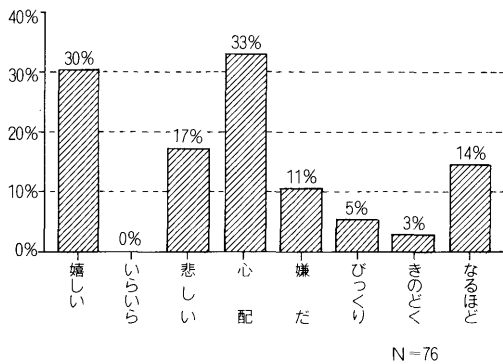


図1 感情分類

2) 感情の傾向とその要因

実習終了時印象として強く残ったことについての記載の中から、図1の感情とは別に、感情傾向を3群 (否定・不安・肯定群) に分類した。その結果、不安>肯定>否定群の順となり、図2に示すように、不安群が46人 (60.5%)、肯定群が30人 (39.5%)、否定群が10人

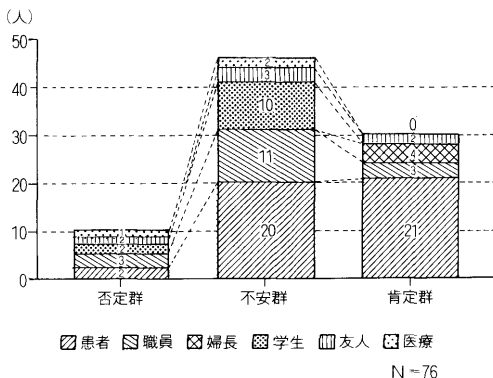


図2 群別感情動向とその要因

(13%) であった。

それぞれの影響要因の上位3項目について、各群を100%としてその内訳の割合をみると、否定群では1位に医療に関するその特殊性・不信感 (30%) を挙げ、同位に職員の患者への態度・仕事の仕方 (30%) を挙げており、3位には学生の実習におけるケア上の失敗や自己の不適性への悩み (20%) を挙げていた。不安群では、1位に患者・家族との人間関係の難しさや緊張 (44%)、2位に看護婦の仕事の大変さ、今まで持っていた看護婦像との差 (24%)、3位には学生自身の勉強不足、看護の難しさ (22%) を挙げていた。肯定群でも1位に、患者との人間関係を挙げているが、割合は不安群のそれを遥かに上回る70%であった。患者からの励ましの言葉・別れの涙等、肯定群の主な理由は患者が何等かの形で学生を受け入れてくれ、信頼関係が成立した事に因るものであった。また患者から学んだ事として、リハビリテーション等への闘病意欲や他者への優しさを挙げていた。さらに2位には婦長からの助言 (13%)、3位に職員 (看護婦) からの指導 (10%) を挙げていた。

3) 感情が及ぼす学習意欲への影響

実習時の感情が、その後の学習意欲にどのような影響を及ぼすかについて、感情群別に図3, 4, 5に示した。図3の「学習に対する達成感」では、t検定の結果否定群と肯定群間で5%以下の危険率で有意差を認めたが、不安群と否定群及び肯定群間には有意差は認められなかった。又設問別にみていくと、設問9の「友人への好影響」で不安群と肯定群間に1%, 設問19の「価値ある学び」では、否定群と肯定群間に5%の有意差が認められた。また、不安群と否定群間には有意差は認められなかった。「学習に対する達成感」の各々の平均点 (5段階評価) は、否定群: 3.45, 不安群: 3.76, 肯定群: 4.12となっており、設問7, 9, 12で、得点の低下が目立っている。図4の「情緒的消耗」における全体的傾向として否定・不安・肯定群の間に有意差は認められず、平均点

は各々 3.74, 3.74, 3.38であった。4 点（時々ある）以上の項目には設問13, 14の学習に向け

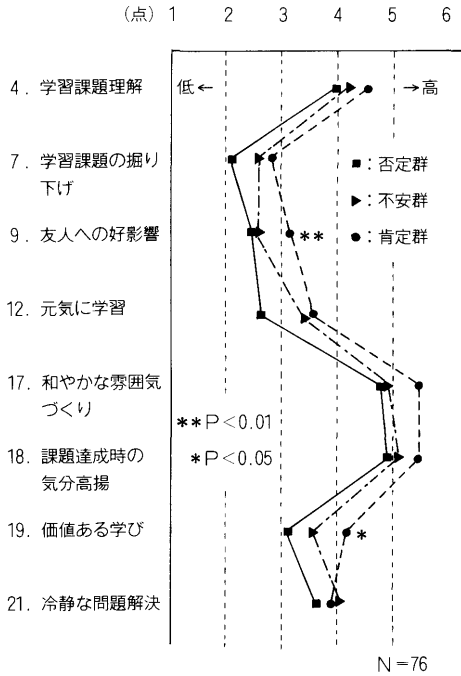


図3 学習に対する達成感

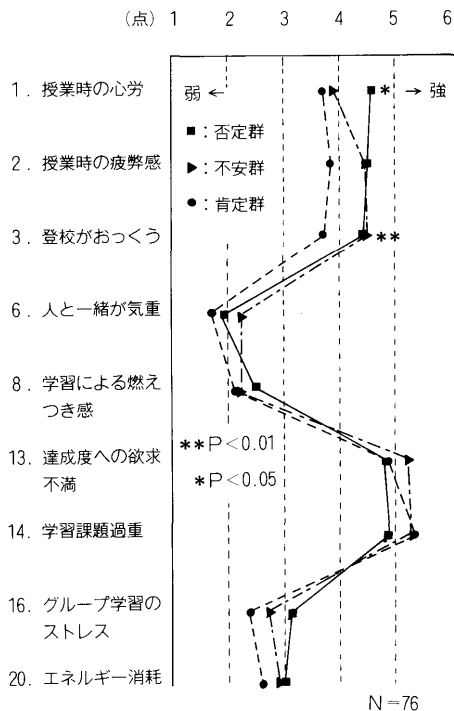


図4 情緒的消耗

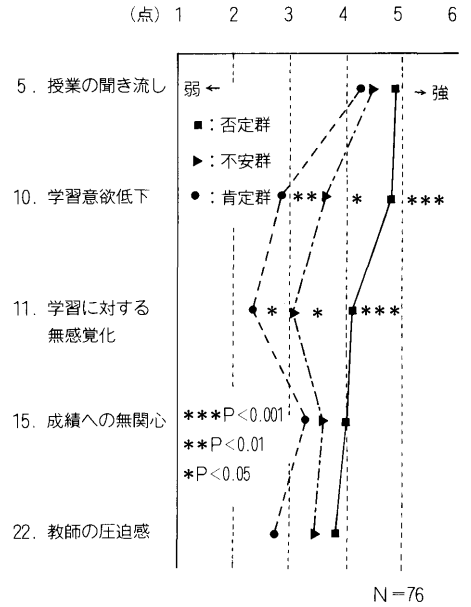


図5 学習離れ

られたものや、設問1, 2, 3の授業に対する拒否感を示すものがみられた。図5の「学習離れ」においては、他と比べて項目による得点の目立った低下や上昇はみられないものの、各々の感情群別のばらつきが大きい。否定群と不安群及び肯定群間では、1%以下の危険率で有意差を示した。否定・不安・肯定群各々の平均点は、4.32, 3.64, 3.12であった。

2. 初回病棟看護実習教育の明確化

1) 初回学習に対する満足度

初回病棟看護実習に対する満足度は5段階評価において平均点3.5で、図6に示すように高い満足度群（4～5点）が57%，低い満足度群（2～3点）が43%であり、その満足度は低いと

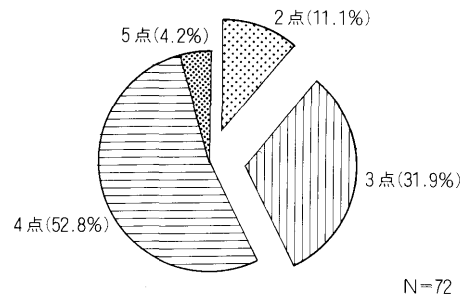


図6 初回実習における学生の満足度

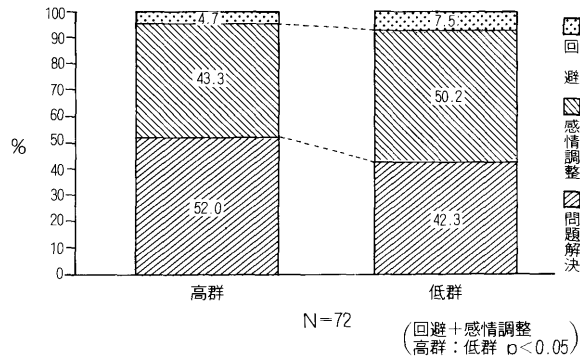


図7 満足度高低別対処傾向

捉えた。また満足度が5点であった者（3名）の理由としては、努力・工夫しコミュニケーションがとれた事を挙げ、2点であった者（8名）のほとんどが何をしてよいのか分からず、課題が達成できなかったことを挙げていることが明らかになった。

満足度高・低群各々の実習上の気がかりな事に対する対処では、図7に示すように低群は高群に比べ、問題解決的対処（ストレスの原因を考え、解決・実行しようと意識的に努力する）が少なく、反対に感情調整（否定的感情を制御し耐えようとする）・回避的対処（否定的感情を否定・無視しようとする）が多かった。

2) 気がかりなことの内容と内訳

気がかりなことの多い内容は、図8に明らかのように、患者の生活援助（148件）、対人関係（123件）、実習取り組み姿勢（116件）、実習課題（101件）、実習環境（98件）の順であった。

さらに各々の内容の細目では、次の特徴が見

られた。まず「生活援助」においては、患者の何処にニーズがあるのか分からず、満足して貰えたのか（34%）、学内実習での方法と違う、何処までどんなケアをすべきか（32%）等戸惑いに関する意見が多く、一方学生自身の身体的疲労の訴えはなかった。対処傾向においては、問題解決対処が72%であり、回避対処は3%であった。

次の「対人関係」ではスタッフとうまく会話できるかの心配（38%）、受持ち患者とのコミュニケーションの難しさ（31%）が多い。対処傾向では、当然のことながら感情調整の割合が多く（63%）みられ、回避対処は8%であった。

また「実習取り組み姿勢」では、実習範囲において何処まですべきなのか（28%）、知識・技術不足を痛感する（23%）に加えて、初めてということでの漠然とした不安（21%）等の精神的疲労に関する訴えが多くみられた。対処傾

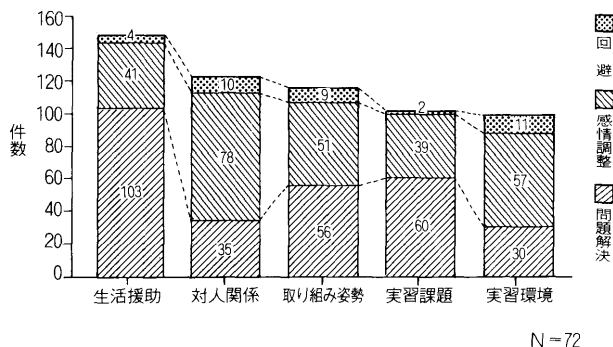


図8 内容別対処傾向件数

向では、問題解決と感情調整の割合は、それぞれ、48%、44%であり、回避は8%であった。

さらに「実習課題」では、計画と実際の違いに関するものや、患者にとって良い計画だったのかどうか(31%)、生活理解という課題が達成されたのだろうか(24%)といった反省、及び記録の多さ(20%)に関するものがみられた。対処傾向に於いては、問題解決の割合がやや多く60%を占め、回避は僅か2%であった。

最後の「実習環境」では、初めてなので病院内で迷わないか、雰囲気になれるか(26%)といった問題に対する不安が最も多く、続いてスタッフの邪魔にならないか(20%)といった気遣いや、朝早くて身体が辛く、緊張で押しつぶ

されそう(17%)といった学生自身の環境適応への戸惑いと疲労が多くみられた。対処傾向では感情調整が58%を占め、回避対処は11%の割合を示した。

3) 内容別対処傾向(満足度高低群比較)

気がかりな事の内容を、満足度の高・低群別において、図9のように対処傾向の比較を行った。対処の割合においては、問題解決対処の高い内容は、「生活援助」と「実習課題」であり、逆に感情調整・回避対処の高い内容は、「対人関係」と「実習環境」であった。更に満足度の高低群比較では、低群は高群に比べ感情調整・回避対処が「生活援助」「実習課題」でやや多く、「実習環境」の戸惑いで有意の差($p <$

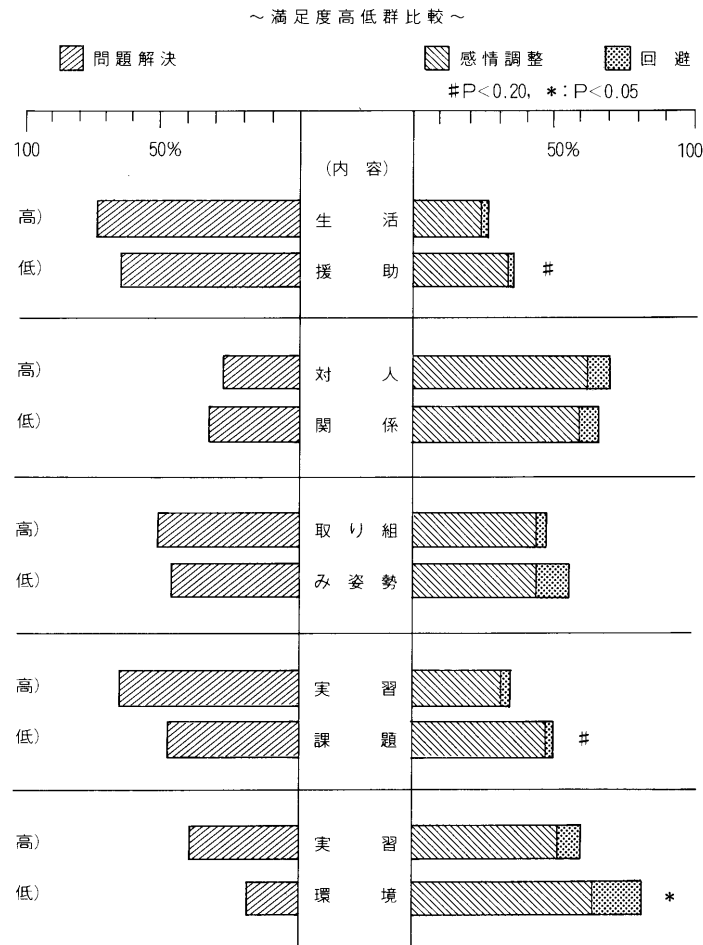


図9 内容別対処傾向

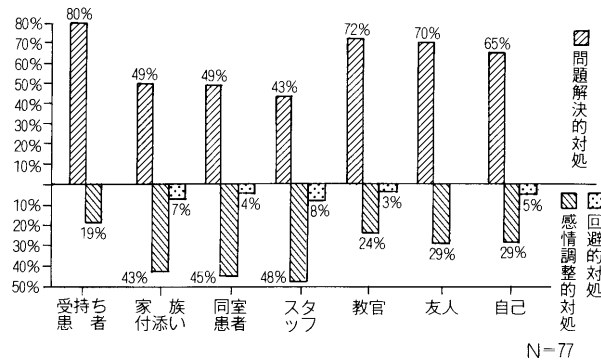


図10 気がかりな内容に対するコーピング (対象別)

0.05) を認めた。

3. 初回病棟看護実習に向けての導入教育の検討

1) 初回病棟看護実習に対する満足度と導入教育の有効性

初回病棟看護実習に対する満足度は5段階評価で平均点3.8であった。高い満足度群 (4～5点) が76%，低い満足度群 (2～3点) が24%で，高満足度群は昨年に比べ約20%の増加となっていた。また体験学習を導入教育として実施した有効性について，94%が「役にたった」と答えている。理由としては，ベッドサイドにおける患者との距離や位置への配慮ができ，誠意・忍耐の大切さを場面を通し実感できた，学習と実習との照らし合わせができた事等を挙げていた。

2) 気がかりな内容に対するコーピング及び実習の体験に関する感想

図10にみるように，コーピングにおいて問題解決型が多いのは受持ち患者，続いて教官，友人の順となっており，感情調整型ではスタッフ，続いて同室患者，家族に多く，回避型が多いのはスタッフ，家族，自己の順である。即ち受持ち患者には問題解決型が多いが，病棟スタッフに向けては感情調整・回避型が多い。

実習の体験に関する感想は，不安で緊張した (29%)，言動に教えられた (23%)，馴れてきた (13%)，自己課題が明確になった (11%)，励みを感じ成長できた (11%)，親しみを感じた (3%)，と述べており，その内訳について

は以下のものであった。1位の「不安で緊張」の影響要因はスタッフや自己であり，2位の「言動に教えられた」の影響要因は教官や受持ち患者であり，3位の「慣れてきた」の影響要因としては同室患者や家族にあったという回答がみられた。

3) 実習への期待内容及び体験の帰属

初回病棟看護実習に対する期待内容は，図11の通りである。最も多かったのは「患者との出会い」で，次は「現場の様子を知る」，その次に「スタッフとの関わり」になっており，スタッフへの期待度も高かったことが分かる。そこで更に，実習前に抱いていた看護婦に対するイメージについても調べてみた。その結果，上位3位には「忙しい」 (21%)，「厳しい」 (14%)，「優しい」 (14%) が挙げられており，「忙しさ」のイメージに加えて，「厳しい・優しい」といったイメージが同比率抱かれていることが分かった。

次に，実習体験上の感想で「不安で緊張した」ことのスタッフへの帰属のさせ方に注目し

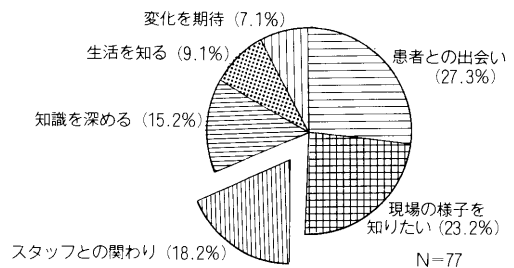


図11 実習への期待内容

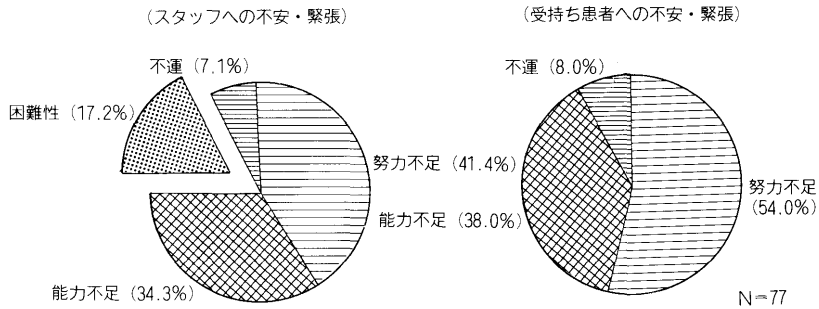


図12 実習への体験（不安・緊張）に対する帰属
—スタッフと受持ち患者の比較—

てみたい。図12は、不安・緊張の帰属をスタッフと受持ち患者別にみたものである。スタッフへの帰属は「努力不足」「能力不足」「困難性」「不運」の順となっている。受持ち患者との比較では「努力不足」が13%少なく、受持ち患者についてはみられない「困難性」が17%ある。そして内的要因である「能力」・「努力不足」への帰属は75%であり、固定的要因である「能力不足」・「困難性」へは51%であった。

考 察

1. 初回病棟看護学習が学習意欲に及ぼす影響

前述の結果を基に、初回病棟看護実習の学生の感情分類による傾向とその要因、その後の学習に対する意欲への影響について考察する。

18～20歳の学生達にとって、初回の病棟看護実習は大きなストレス因子になると考えられる。しかしながら、ストレス因子が必ずしもストレス反応を引き起こすわけではなく、個人の資質によって大きな差がある事が、図1の結果からも明らかである。

感情分類の中の「嫌だ」という感情や群別感情分類の否定的感情は、再評価と認知的な対処がその状況の意味を変えず、苦痛を軽減し得ないときに起きるとされている。それ故、否定的な感情に対して問題中心型コーピングを妨げず、忍耐強さを保って行く為の何等かの調整⁴⁾が必要であり、否定群の要因3位に挙げられている様な学生に対する関わりが、今後必要となってくるであろう。

‘不安群’と呼ばれる否定的だが、前向きな群が全体の50%という高い値が示した結果から、‘帰属のさせ方如何が、自分の安寧に関するその出来事の意味づけ方に影響を与える⁴⁾’とされている事に関連し、学生自身が困難に対して忍耐強く、希望を持って臨んで行けるような関わりが今後必要である。

その後の学習に対する意欲への影響を群別に分析した結果、図5の「学習離れ」における、設問10の‘学習意欲低下’や設問11の‘学習に対する無感覚化’で明らかになったように、特に学習の影響において否定群は他の不安・肯定群に比べて有意に学習離れが進んでおり、情緒的消耗が強く達成感の少ない学習をしていることが分かった。

初回病棟看護実習は、多くの新鮮で感動的な学びを与えてくれる反面、ショックも大きく、その教育の重要性が問われる。そしてストレスへの対応が、関係志向的かつプロセス志向的である⁴⁾ことを考える時、ストレスを肯定的に認知し、問題解決的に対処して行けるような関わりや、支持体制を築いて行ける教育が必要である事が示唆される。

2. 初回病棟看護実習教育の明確化

初回病棟看護実習の満足度は、初回という点で既修得の能力よりも、むしろ学生が今回の達成活動目標を何処に位置づけ、認知するかによって大きく変動すると思われる。また結果の成功（または失敗）原因を内在的要因（能力・努力）に帰着させる時は、達成の高い報酬価値を

持ち積極的取り組みをするが、逆に外在的要因（課題困難度や運）への帰着は、報償価値は低く積極的取り組みを生じにくい⁵⁾と言われる。これらは今回の満足度理由や対処傾向結果と一致するものであり、今後の学習・実習への影響も含め、満足度を高めて行くような動機づけへの検討が必要である。

気がかりなことの内容として、環境・雰囲気には馴染めるか、患者・スタッフの邪魔にならないかを心配する一方、今まで習ってきた授業とのギャップや自分の知識・技術不足を痛感し、記録の多さ・朝の早さ・緊張による身体の辛さを訴えている点等、「燃えつき」過程の「ショックと拒絶期」の特徴と一致する。その後の多くは問題解決的に対処し、「回復期」再評価の「文化期」を迎えるが、回避的対処をとる場合、適応できず辞める結果を招く⁶⁾と言われている。こうした結果を招かないために教育においては、感情調整・回避的対処傾向をとる学生に支援体制で臨む事は勿論、その要因となる気がかりな内容への検討・対策を明らかにしていくことが、課題となっている。

そこで、教育の対応に対処行動別に分けて考えて行きたい。まず、全般に問題解決的対処が高く、且つ満足度低群が高群に比べ感情調整・回避的対処の多い行動をとる「生活援助」「実習課題」に関しては、内発的動機を高め、適切な目標を設定する事が大切である。その具体策として、3つの方法が考えられる。1つは、何処まで何をすべきかという、戸惑いの多かった目標の明確化への検討と次段階へと連続したステップの明示、次に好奇心を高めてゆく情報の呈示としての事前学習の導入、更に「結果の認知」と呼ばれる進行状況や結果についての情報を、各自にフィードバックさせることにより、努力への帰属志向ができる働きかけをする事等が挙げられる。

次に、感情調整・回避的対処の割合の高かった「対人関係」「実習環境」への対応について述べたい。発達とは絶えず新しい世界への直面を迫られる事であり、その超え方が具体的な発

達の姿であり、他者との関係のあり様が、危機を産み、危機を克服せしめる¹⁾と言われる。新しい経験と自己概念の不一致が招くこれらの対処行動に対して、「無条件の積極的関心」「共感的理解」という治療の人間関係によって、初めて適応が可能になると言われており、それは指導者と学生との関係を如何に創っていくかを意味すると思われる。そして看護においても、永遠のテーマでもある「対人関係」を、学生が如何に学び自己実現していけるか、長期展望に基づいたきめの細かいプログラムの検討が必要であり、本校独自の「臨床看護総論Ⅱ」の中で、更にその刷新を図っていきたいと考えている。

3. 初回病棟看護実習に向けての導入教育の検討

過去2年間の初回病棟看護実習・検討における大きな課題は、新鮮で感動や学びが大きい反面学生への負担も大きい、初回病棟看護実習を如何に捉え、どのような方向に位置づけていくかであった。それは、基礎技術の応用や各論実習の前段階傾向として偏りがちであった実習から「初めて患者と出会うことやその生活理解」に重点を置いた内容変換へのプロセスでもあった。

学習目標の達成意欲は、目標の魅力と学生の動機の強さによって決まる為、達成意欲を高める為には学習目標に魅力を感じさせ、それに到達しようという願望をもたせることが必要だ⁵⁾と言われる。これらに基づき適切な学習目標の設定への検討を重ねてきたが、今回の満足度の大幅な上昇は一つの指標として捉えられよう。そして今回の体験（生活援助・人間関係）に基づく導入教育の実施は、上述の理由にも見られるように学習と実習の照らし合わせにつながり、内発的動機づけを高めるのに役だったものと考えられる。

次に「気がかりな内容に対するコーピング」や「実習上の体験に対する感想」における結果として、受持ち患者に対しては、言動の学びや慣れの中で比較的状况を変えうと捉えた。しかし、スタッフに対しては、状況は変えられ

ず、不安・緊張が強く、その苦痛な感情をコントロールしようとする調整が起こったこと、その予防やケアが友人間で多くなされていたことが推察される。さらに感情調整・回避型が多かったことは「実習への期待・看護婦へのイメージ」の結果ともあわせて、次の様なことを想起させる。一部の学生は、看護婦の忙しさはある程度認知しながらも、一方では受け入れられることに期待を高く持っていただけに、失望し近接・回避の葛藤を起し、現実からの逃避を考えたと思われる。

能力・適性のない場合は葛藤を起すが、多くは克服の為に新しい動機づけをして、適合するように努力する。しかし一部のものは、学習意欲をなくし学業不適合をおこし挫折する⁷⁾と言われている。そういった意味から初回病棟看護実習は、学生達にとっては将来の自己像と重ね合わせ、適性や能力への自己評価を行う機会でもあり、適性への可否判断がその後の学習意欲を左右すると言えよう。

そこで葛藤をどう受け止め適応していくかが問題となるが、「不安・緊張」の帰属のさせ方において、受持ち患者よりもスタッフに対しての方が「努力不足」が少なく「困難性」が有意に多かったことは、次回への努力減退や失敗感を危惧させるものである。そういった意味から、学生が次回に向けて意欲的に、満足感をもって臨めるような教育的配慮が必要である。特に「困難性」に対しては今後の課題として、学生がどういう場面でそのように感じていたのかを明らかにすると共に、理解を深めていけるような、系統立った看護職との意見交流の場面設定が必要であることが示唆される。

平成4年4月から実施された医療費の改定では「看護婦の処遇改善」が最大の柱となり、今日看護婦不足が社会問題になっている。その将来を担おうとしている学生達が、看護婦を取り巻く諸問題を客観的に見つけ、回避ではなく問題解決していけるよう、また自信と理解が深められるような経験や交流を目指し、教育内容の検討を図っていききたい。

ま と め

1) 初回病棟看護実習が学習意欲に及ぼす影響
学習への影響において、肯定群に比べて否定群はその後学習離れが進んでおり、情緒的消耗が強く、達成感の少ない学習をしている事が分かった。初回病棟看護実習時の印象が、その後の学習意欲に大きく影響するため、問題に対して肯定的に認知し、問題解決的に対処していける関わりや、支持体制を築いていける教育が必要であることが示唆された。

2) 初回病棟看護実習教育の明確化

問題解決的対処の高い項目は生活援助、実習課題であり、感情調整・回避的対処の高い項目は対人関係、実習環境であった。なお満足度低群は高群に比べ、生活援助、実習課題でやや多く、実習環境の戸惑いで有意の差を認めた。

よって生活援助、実習課題に対しては、内発的動機を高め適切な目標設定をする方法で、また対人関係、実習環境については、治療的人間関係を創っていく事によって、教育における関わりを実現させるプログラムの必要性が示唆された。

3) 初回病棟看護実習に向けての導入教育

新カリキュラムにおける、導入教育に続けた今回の実習は、満足度の高い者が76%を占め大幅な改善が見られた。コーピングにおいて受持ち患者に対しては問題解決型が多いが、病棟スタッフには感情調整・回避型が多かった。不安・緊張を高めているのは病棟スタッフのようである。今後の課題として、「努力不足」が少なく、「困難性」がみられる項目について、学生がどういう場面でそのように感じていたのかを明らかにすると共に、系統立った看護職との意見交流の場面設定が必要であることが示唆された。

文 献

- 1) 早坂泰次郎：現代人の心理学、東京：川島書店、1990：127-130
- 2) 近澤範子：看護婦の Burn out に関する要因分析。

- 看護研究 1988 ; 21 (2) : 42-43
- 3) 斎藤 勇：対人関係の分解図. 東京：誠信書房，
1990 : 94-107
- 4) Folkman, S: パーソナル・コントロール，ストレス，
コーピング・プロセス：理論的分析（黒田裕子・中西睦子訳）. 看護研究 1988 ; 21 (3) : 36,
45, 47
- 5) 渡辺秀敏：教育心理学への道. 東京：ミネルヴァ
書房，1978 : 112-122, 130
- 6) 南 裕子：燃えつき現象の精神看護学的推論. 看護
研究 1988 ; 21 (2) : 15
- 7) 遠藤辰雄：アイデンティティの心理学. 京都：ナ
カニシヤ出版，1991 : 181

アンケート

第1回質問紙

「初回病棟実習が学習意欲に及ぼす影響」

今後の実習のあり方を検討するために、あなたの達成度を調査したいと思いますので以下のアンケートにご協力下さい。

なお、このアンケートは今後3回にわたって継続していく予定です。

_____ 回生 年齢 _____ 歳 性別 女・男

実習経験科 第1内科・第2内科・第3内科・老年科神経内科・第1外科

第2外科・整形外科・婦人科・泌尿器科・耳鼻咽喉科

以下の22の質問項目の1つ1つについて、あなたは最近どの頻度で体験しましたか、該当する箇所に○印をつけて下さい。

※1)

	まったく ない	ごくまれ にある	まれに ある	ときど きある	しばしば ある	たいてい ある	いつも ある
	1	2	3	4	5	6	7
1. 授業ではかなりの心労がある……………							
2. 一日の授業が終わったとき疲れ果てた気持ちである……………							
3. 朝起きたとき疲れを感じ、授業に出かけるのがおっくうになる……………							
4. 教師が教えようとしている課題は容易に理解できる……………							
5. 授業を聞き流している自分に気づくことがある……………							
6. 一日授業で人と一緒にいることは非常に気をを使う……………							
7. 学習すべき課題に対して掘り下げた学びができて……………							
8. 学習することで燃えつきてしまった気持ちである……………							
9. 学習をとおして友達により影響を与えている……………							
10. 最近学習に対してやる気をなくしてきている……………							
11. 最近の学習は自分の気持ちを無感覚にしてしまうような気がする……………							
12. 元気はつらつとして学習している……………							
13. 学習の達成度に対して欲求不満を感じている……………							
14. 学習課題が多すぎてこなすのが大変だ……………							
15. 成績がどうであろうと気にしなくなってきた……………							
16. グループで学習することは非常にストレスである……………							
17. 誰とでも容易になごやかな雰囲気をつくることができる……………							
18. 学習課題が達成できたとき気分が高揚する……………							
19. 多くの価値ある学びを成就している……………							
20. 全てのエネルギーを使い果たしたような気持ちである……………							
21. 学習上で困難に直面した時冷静に問題解決をはかることができる……………							
22. 私の学習態度について教師が私を責めているような気がする……………							

総合実習Aにおいて、現在も印象として強く残っていることを書いて下さい。

※2)

※1) 図1, 図2参照, ※2) 図3, 図4, 図5参照

項 目	具体的内容(自由記載・3項目) ^{※4)}	強 さ の 程 度	記号	対処方法（←傾向の強いものを選択し、記号を各々左欄に記載の事）
① 実習への取り組みに於て	1.	低) 1 2 3 4 5 (高)		A. - 自分で出来ない事は、誰かに頼んでやってもらう。 - その場で何とか状況を改善しようとする。 - 何が問題かを分析する。 - 色々な方法を試みて、一番良い方法を探す。 - 相手に対して自分の立場を説明して、分かって貰おうとする。 - そのことについて相手と話し合っ、何とかしようとする。 - 本を読んだり、人に聞いたりして、情報を集める。 - 過去の経験に照らしてみる。 - カンファレンスや講演会等に参加して勉強する。 - 他の人の意見を聞いて参考にする。 B. - 何とかなるだろうと思って、くよくよしない。 - 自分にとっての意味を見い出して気持ちを安定させる。 - 宗教的なものをよりどころにする。 - ものごとに動じないように自分を保つ。 - その場で感情を率直に表出する。 - 不満や愚痴を誰かに話す。 - ものごとを良いように解釈する。 - ユーモアで重い気分を吹き飛ばす。 - 自分で出来ることはこまめだと納得して、それ以上悩まない。 - 感情を押さえてじっと耐え、我慢する。 C. 酒、間食などで気を紛らわす。 - ふて寝をする。 - なるべくそれに関わらないようにする。 - 内にこもる。 - 睡眠剤や安定剤を常用する。 - その場からできるだけ早く立ち去る。 - スポーツ、趣味、サークル活動、ドライブ等に熱中して、嫌な事を忘れる。 - 愚痴や不満はあっても口に出さない。 - その事については、それ以上考えないようにする。 - ぼうっとして、とりとめもない思いにふける。 (近澤範子：看護婦の Burn out に関する要因分析、看護研究より)
	2.	低) 1 2 3 4 5 (高)		
	3.	低) 1 2 3 4 5 (高)		
② Pt ケアーに於て	1.	低) 1 2 3 4 5 (高)		
	2.	低) 1 2 3 4 5 (高)		
	3.	低) 1 2 3 4 5 (高)		
③ 対 人 関 係	1.	低) 1 2 3 4 5 (高)		
	2.	低) 1 2 3 4 5 (高)		
	3.	低) 1 2 3 4 5 (高)		
④ 実 習 環 境	1.	低) 1 2 3 4 5 (高)		
	2.	低) 1 2 3 4 5 (高)		
	3.	低) 1 2 3 4 5 (高)		
⑤ 実習内容・実習課題	1.	低) 1 2 3 4 5 (高)		
	2.	低) 1 2 3 4 5 (高)		◎実習に関する自己満足度^{※3)} 選択理由 低) 1 2 3 4 5 (高)
	3.	低) 1 2 3 4 5 (高)		

※3) 図6, 図7, ※4) 図8, 図9参照

人間関係に於ける対処方法（基礎看護実習）

項 目	気がかりな内容(自由記載、一語文で) ^{※5)}	対処方法 ¹⁾	体験への感想 ²⁾	体験の主な原因 ³⁾ ※6)	今後への課題(自由記載)	〈選択内容〉 1), 2), 3) について
受 持 ち 患 者						1) A. ・自分で出来ないことは、誰かに頼んでやって貰う。 ・その場で何とか状況を改善しようとする。 ・何が問題かを分析する・色々な方法を試みて、一番良い方法を探す・相手に対して自分の立場を説明して、分かって貰う・その事について相手と話し合い何とかしようとする。 ・本を読んだり、人に聞いてみたりして、情報を集める。 ・過去の経験に照らし合わせてみる。 ・カンファレンス等で勉強する。 ・他の人の意見を聞いて参考にする。 B. ・何とかなるだろうと思ってくよくよししない。 ・自分にとっての意味を見だし気持ちを安定させる。 ・宗教的なものを依り所とする。 ・物事に動じないように、自分を保つ・その場で感情を率直に表出する。 ・不満や愚痴を誰かに話す。 ・物事を良いように解釈する。 ・ユーモアで重い気分を吹き飛ばす。 ・自分で出来る範囲を納得して、それ以上悩まない。 ・感情を押さえてじっと耐え、我慢する。 C. ・酒・間食などで気を紛らわす。 ・ふて寝をする。 ・なるべくそれに関わらないようにする。 ・内にこもる。 ・睡眠剤や安定剤を常用する。 ・その場からできるだけ、早く立ち去る。 ・スポーツ、趣味、サークルに熱中し嫌な事を忘れる。 ・愚痴や不満はあっても、口に出さない。 ・その事には、それ以上考えない様になっている。 ・ぼうっとして、とりとめもない物思いにふける。
家 族 ・ 付 添 い						
他 ・ 同 室 患 者						
ス タ ッ フ						
友 人						
教 官						
自 己 の 中 で						2) D. 不安・緊張の連続である。 E. 馴れてきた・あせりがなくなってきた。 F. 慕われていると思う・言う事をきいてくれる。 G. 言動に教えられた・見直すことができた。 H. はげみを感じる・ありのままの自分を出せる自分も成長していると感じる。 I. 自己課題が明確になり、誇りと生きがいを感ずる。
臨床看護学総論Ⅱ 体 験 学 習 人間関係について	①体験学習は、実習に役立ったと思いますか？（はい・いいえ） ↓ ②それは、どのような場面でしたか？		③今後、体験学習に望むことは？ （体験しておきたかった事、取り入れて欲しい内容） ・ ・ ・			
						3) J. 能 力 K. 努 力 L. 課題の困難さ M. 運

※5) 図10参照, ※6) 図12参照

基礎看護実習（実習前・後の変化と学び）

	実 習 前 (看護体験：有・無)			実 習 後 (実習科： 科)		
	質 問 項 目	内 容 (キーワード、一行文で記載して下さい)	強 さ (低 → 高)	実習での実際 (実習前と比較)	場 面 (最も影響を与えた)	理 由 (最も影響を与えた)
学	1. 実習への期待	①	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5		
		②	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5		
		③	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5		
生	2. 実習への気がかり	①実習への取り組み姿勢	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5		
		②Pt ケア ー に 於 て	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5		
		③対 人 関 係	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5		
		④実 習 環 境	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5		
		⑤実 習 内 容 実 習 課 題	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5		
身	1. 看護婦さんに対するイメージ	①	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5		
		②	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5		
		③	1 2 3 4 5	1 2 3 4 5		
実 習 終 了 後 の 満 足 度				1 2 3 4 5		

※7) 図11参照